米原博文さんの油絵の世界

南地区に住む、米原博文さん(84)が描く油絵の世界は、実に壮大でとても繊細。米原さんはこれまで阿蘇の風景などを描き、数々の賞を受賞しています。また飯田地区の常楽寺や広崎地区の猫伏石の風景画も手掛け、町内の学校や施設に寄贈しています。

「油絵を始めたのは、定年を迎えた60歳になってからです。それまで絵なんて描いたことがなかったとです」と言う博文さんに、絵を描くことを勧めたのは妻の博美さん(82)だそうです。

「毎日、晩酌を欠かさないお父さんの休肝日を作ろうという目的で、油絵を勧めたんです」と博美さんは笑って当時を振り返ります。

以来、博文さんが描いてきた油絵は数知れず。自宅の玄関から茶の間まで作品が所狭しと飾られ、まるで美術館のようです。米原さん夫婦の共通の趣味は陶芸。自宅の窯で焼いた湯飲みや花器など、どれも本格的な腕前です。

さてさて、気になる博文さんの休肝日ですが…。「なーん毎晩、飲みよるです。絵は昼間に描くとよかけんね、へへへ」と博文さんはお茶目に笑いました。

自宅2階のアトリエで筆をふるう米原博文さん

上／仲むつまじい米原博文さんと博美さん夫婦
左／奥は博美さんが手掛けた花器、手前は博文さんが作った湯飲み茶わん

母亡き後、父と共にベビーリーフで起業

平田中にある「みっちゃん工房」では、数種類のベビーリーフが育てられています。

代表の光永カオリさん(48)は、「21年前に母が52歳で亡くなり、父が提案したベビーリーフを家族で栽培しようと一念発起し、起業しました。今から17年前のことです」と話します。

「みっちゃん工房」では17人のスタッフが働いており、その中にベトナムからの技能実習生の若い女性スタッフが5人います。明るくいきいきと働く姿が印象的です。

実習生たちは光永さんの自宅敷地内で生活しながら、休日になると遊びに出かけます。光永さんは、『どこに行くの?』、『暗くなる前に帰ってきなさいよ』と心配で、まるで母親のような気分です」と笑います。数年前には、20歳を迎えた実習生たちを、町の成人式に着物姿で参加させました。

「これからもこの国の素晴らしい文化や、日本で働くことの楽しさを伝えながら、国際交流の一助になればと思っています」と光永さん。実習生たちの労働滞在期間は3年で

「みっちゃん工房」のスタッフの皆さん

工場内は隅々まで清潔に保たれています

持ち前の明るさで工房を運営する光永カオリさん